

薬漬け状態で医師の自己満足になってしまうことがよくある。

一般西洋薬の眼病への効果が期待できず、漢方薬の効果も信じられない眼科医のために、ここでは症例を中心に挙げる。その症例のほとんどは大学病院、総合病院で診断され加療を受けるも満足な効果がみられず、また、一般診療所を転々と受診を繰り返すも治療効果が上がらず、患者さん自ら漢方治療を希望して受診したものを選んだつもりである。

一部の症例は学会（日本東洋医学会学術総会・関西支部例会、眼科と東洋医学研究会、日本瘀血学会、日本プライマリー学会、久留米大学眼科研究会）で報告したり、また各漢方医学誌に投稿した症例だが、その後の経過が分かるものは加筆した。

また、眼病の患者さんは漢方薬で治療しようとする人が少ないのか、著者が漢方を学んだ近畿大学東洋医学研究所でも、京都の聖光園細野診療所でも、眼病の患者さんは皆無の状態だったし、『大塚敬節著作集』や矢数道明先生の『漢方百話』などの症例集を見ても、あまり眼病の報告が見られない。更に眼科医でもあった藤平健先生の眼科院でさえ、7～8割は他科の疾患で、2～3割が眼病であった。しかもその眼病の大半は老人性白内障、網膜色素変性症であり、黄斑変性症やブドウ膜炎、眼底出血、春季カタル、シェーグレン症候群などは非常に少なかった印象を持っている。

このような状況から、漢方の効果について「自然治癒だろう」とか「診断名がおかしい」とか「治る時期だったのでだろう」などと批判を受けるであろうことを考慮し、本書に採り上げた症例の選択と漢方治療の効果判定については以下に示す基準を設けた。

症例の選択基準について

漢方医学を学び始めて10年間位は、東洋医学・漢方医学の説明から入り、納得して頂いた患者さんに漢方治療を行った。それ以後は患者さん自らが漢方治療を求め受診した場合のみ漢方治療を行い今日に至っている。

①大学病院、総合病院などで西洋医学による治療で治らず、満足な結果が得られない患者さん。

②著者の東洋医学・漢方医学の説明で納得した患者さん。

③自ら漢方治療を希望した患者さん。

以上の患者さんの症例の中で、漢方治療を実施し良好な経過をみたものを選んだ。

漢方治療の効果判定基準について

眼科における漢方薬の効果判定は、西洋医学の先生方になかなか信用されないことが多い。

その原因の一つとして、前述の如く眼科における薬は「ステロイド、抗生剤と麻薬。それ以外は効かない」という専門家が多く、内服薬の信用度が低いためである。したがって漢方治療により治癒したと報告しても、それは「自然治癒であろう」、「診断名の誤りであろう」と断定されることが多いのである。

次に漢方方剤の薬理作用が明らかにされていないからであり(生薬レベルではかなり解明されているのだが)、また、眼内移行がない、それ故、効いているという根拠が証明されないことによる。

また、西洋薬であれ、漢方薬であれ、薬の効果判定の基準が明確に定義されているのではなく、処方した医師の判定によることが多い。もちろんプロトコールを作成し、統計的処理はなされるとしても、また二重盲検法で行われた場合でもプラセボ効果も認められているのだから。まして一例一例の報告である漢方治療の効果判定となると、より信用度が低いと思われる傾向がある。

更に、疾患により治療日数の定義がないので、例えば風邪に葛根湯を1週間10日間と処方して10日後に風邪が治ったとしても、その葛根湯が風邪に効いたと判断する医師もいれば、葛根湯を続けたために10日間も治らず長引かせてしまったと判断する医師もいるであろう。

急性結膜炎に抗生剤と葛根湯を処方(?)し、10日も14日も治癒するまで要したならば、これは明らかに葛根湯で病気を引き延ばしてしまったと考えるのが普通であろう。

ドライアイに何か漢方薬を処方(?)して不眠や口乾が取れたとしてもヒアレイン®等の点眼を必要とするなら、眼病には漢方薬の効果はないと考えるのが妥当だと思われる。

これらは板倉武氏が治療学を提案するように、薬の効果の有効・著効などの定義を決めることが重要である。しかし、各疾患に対するその効果の定義は未だないため、著者は効果判定基準を以下のように考えている。

*

①前医で治療を受けているもの。前医としては大学病院、総合病院などはより良しとした。

②できる限り随証治療を心掛け、漢方薬の使用目標が改善し、眼病がそれら随伴症状の改善に平行していること。

③ステロイド、ビタミン剤、止血剤、消炎剤など内服薬は併用しないこと。処方されているステロイド以外は直ちに中止し、ステロイドも極力短い期間で中止するようにしている。

④眼局所の治療も緑内障点眼のみで、他の点眼は併用しない。ステロイドの点眼も極力早期に低濃度に変更し中止するようにする。

⑤ある期間ステロイドの点眼・内服を行っていたものは、中止して3年以上経過を観察したもの。

⑥急性感染症では抗菌剤などを用いず、漢方薬のみで数日以内に治癒すること。

以上の条件で日頃より漢方治療を行い、その漢方治療の効果を判定している。

「漢方薬は効くものではない。効かせるのだ」といわれているが、この効かせるために、うまく処方できるよう今後も心掛け、精進しなければならないと、常々著者は考えている。

以下、疾患は漢方治療がよく応用されかつ効果的な領域の順で掲載する。